

C-54 服飾における形式と内容
県立新潟女子短大 山崎光子

目的 美は事物の所与としてではなく、感性に照応して成立するものにちがいはない。しかしそれがあらゆる任意の対象に、あるいは主観的好みによって定められるものではなく、そこに美的判断の同一性が求められるために、芸術ほど美的対象の構造が問われてきた。服飾においては、それが人体を基に計測し、機能的デザインによって機械的に構成されるかぎり、効用を目的とする物質にすぎないが、服飾が人間の感情の表出の場として本来的な生の具体的な表現を成してきたことは、その歴史をふりかえるまでもなく明らかであり、その意味で芸術作品と共通の一面をもつと考える。その二面性をもつ服飾における美のあり方を問うてみた。

方法 Friedrich Schiller の「カリアス書簡」を主な手がかりとして確かめた。

結果 Schiller が形式と素材の合一したところに美を見出したように服飾においてもその形式と内容の調和が必要と考える。形式とは「いかに表現するか」であるが、服飾では、例えば機能性をはじめとして社会性、風土性、あるいは技術的制約などのあらゆる条件をさし、これほしに服飾は実在現象として現われることができよう。また内容とは「何を表現するか」であって、それが美の根拠とほるのでははないか。感性にもとづく詩情が一人あるきしたものでなく、また理性や技術のみによって形骸化したものでなく、内容が充分に形式を生かして内容を意識させない形式にまで現象した時、それは美を内包した服飾とほるのでははないだろうか。